

2017年11月20日発行

漁師塾を立ち上げる

田園回帰ならぬ漁村回帰の話である。

先日、三重県の志摩半島にある阿児町志島という漁村に足を運んできた。志摩半島の入り口にあたる鳥羽から車で南へ4、50分。英虞湾の少し手前、熊野灘に面し、美しい砂浜もあって、たくさんサーファーたちでにぎわっていた。きれいで豊かな海が広がり、海女漁や伊勢海老漁が盛んなところでもある。

ここに畦志賀漁師塾がある。この地域もご多分に漏れず後継者が不足して、漁業は衰退の一端をたどってきた。このままでは漁業が途絶えてしまうと危機感を抱いた漁師たち14人が、もはや自分たちの子どもに継いでもらう時代は終わった。外から若者と呼んできて漁師に育てていくしかないということ、独立自営漁業者の確保・育成をねらいに、志島と隣隣の畦名と甲賀の漁村が合同して、平成22年11月に畦志賀漁師塾を発足さ

せた。

徹底したOJTによる育成

漁師自らが指導者となって海女漁や伊勢海老漁等の実践をしながらの指導・OJTに力を入れるとともに、定期的に勉強会を開催し

26人の漁業者がいるが、そのうちの3割が塾の卒業生となり、しかも30歳代の5人全員、40歳代5人のうち3人が塾の卒業生である。地区内出身の漁業者は7割を占めてはいるが、その大半が60、70歳代であることから、地区外出身の

時流を読む

海女漁を引き継ぐ
Iターン者たち

農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

てきた。資源管理をはじめとする漁業者間のルールだけでなく、地区住民としての日常生活のルールを徹底して身に付けさせてきた。志島地区では8人の希望者を受け入れ、その全員が定着したというから驚きだ。今、志島地区には

漁業者たちが中心となって、次代を担うことになる。また甲賀地区では定着した塾生が10人を超えているという。

可能な経済的自立

海女漁は5月1日から9月14

日まで行われる。この間、新人で水揚げは50万円程度にとどまるが、3年目になれば120〜130万円。10月から4月までは伊勢海老の刺し網漁の季節となり、250万円程度の水揚げが見込まれ、通年では370万円前後の収入となる。ただし、伊勢海老の刺し網漁を行うためには漁船が不可欠となり、このための投資負担が発生する。伊勢海老漁には出ないで、コンビニ等、陸に上がって現金を稼ぐことも可能だ。これにちょっとした畑を耕して自給用の野菜をつくれれば、ここで生活していくには十分だという。

ここで生きていくのに一番必要なことは何かを、海女をしている塾卒業生に聞いてみると、異口同音に「海が好きなこと」という答えが返ってきた。

海女の多くは結婚して子どもも授かり、すっかり地域住民そのものとなっている。その表情はいずれも生き生きし、あたらしい若者の生き方を垣間見た思いがした。